

Ⅶ-108

利用者意識から見たため池公園の環境資源価値評価の研究

パシフィックコンサルタンツ(株) 正会員 平野久史
 関西大学大学院工学研究科 正会員 和田安彦
 関西大学工学部土木工学科 正会員 三浦浩之

1. はじめに

市街地内の水環境が抱える問題に、①親水性の欠如、②水質の悪化、③安全性の確保、④流域の都市化、⑤生態系への影響の変化、⑥水辺の消失等があり、これらの問題を解消できる水環境整備が求められている。これまで筆者らは、市街地内の池を持つ公園に対して利用者が環境資源としてのため池や水環境整備に対してどのような評価をしているのかを調査し、公園における池の位置づけや親水空間に対する評価について検討してきた¹⁾。本研究では、数量化Ⅱ類を用いて、年代別の評価に大きく影響を与えている要因を検討した。

2. ため池公園利用者への意識調査概要

市街地内のため池を持つ公園 I 池を選定した。本来、農業利水として活用されていたため池を写真-1に示すように、親水性等の付加価値を与えることで公園としての利用が可能となったため池である。調査は、公園の利用者を対象に直接面談方式により調査を実施した。調査の概要を表-1に示す。

本調査での利用者属性を表-2に示す。利用者の多くは、ため池公園の立地条件から隣接するSU市からの利用者が多数を占める。利用者の年代を図-1に示す。利用者は10代以下が30%を占め、その他の年代は14~20%程度である。



写真-1 調査対象池概要

表-1 意識調査概要

調査対象	I池およびI池公園利用者
調査期間	秋季：1996年10月～1月 夏季：1997年6月～9月
調査方法	質問票を用いた直接面談
サンプル数	秋季：86、夏季：103
調査項目	① 属性、利用状況 ② 施設・整備に対する評価 ③ I池公園に対する要望 ④ I池公園の評価 等、全16項目

表-2 回答者属性

性別	男性 38%、女性 62%
年代	10代以下 30%、20代 18%、30代 21%、 40・50代 14%、60代以上 17%
住所	SE市 31%、SU市 62%、その他 7%
利用頻度	ほとんど毎日 42%、週に2～3日 25%、 月に2～3日 16%、ほとんど来ない 18%
利用目的	運動 31%、コミュニケーション 41%、 趣味 6%、休息 18%、遊び 26%、その他 13%

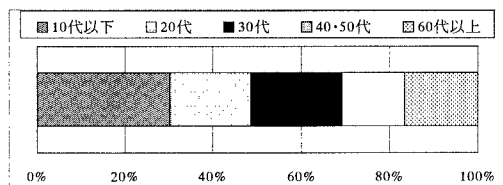


図-1 対象親水公園の利用者年代別割合

3. 利用者による環境資源価値評価

I池公園には、水辺の景観を損なわないよう、また池の雰囲気と合うように形状と材質を工夫した波状の鉄柵、水質保全のための池水の流動を促進する水流機とそれを覆う擬似岩石のカバーで構成される浮島が設置されている。これらの施設に対する評価を図-2、3に示す。これらの施設に対して人工的であるという評価は10代から30代まで年代が高くなるにつれて多くなっており、30代を境界にして40・50代以上では減少の傾向がある。特に水質改善施設の評価では30代を境に40・50代以上と若い年代では大きく異なっている。

キーワード：ため池公園、環境意識、環境資源、数量化Ⅱ類
 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 TEL 06-6368-1121

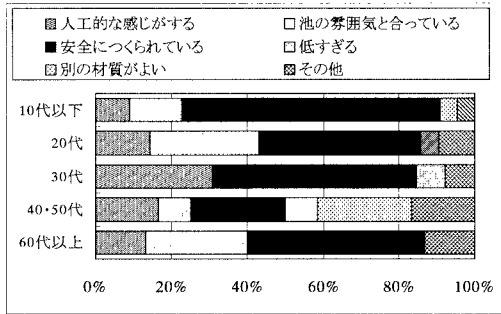


図-2 水際安全施設（鉄柵）に対する年代別割合

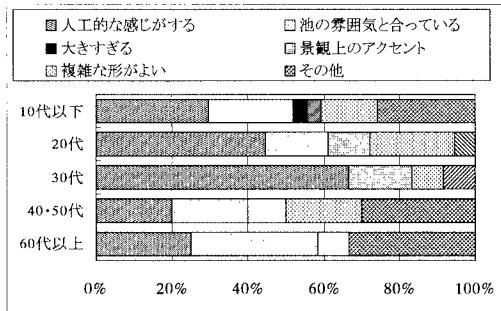


図-3 水質改善施設（浮島）に対する年代別割合

表-3 目的要因と説明要因

目的要因	説明要因
水流機の擬似自然化に対する評価	
ため池公園が個性的	(1.472)
虫が多い	(1.396)
樹木が多い	(1.260)
鳥が多い	(1.258)

説明要因の（ ）内の数値は、レンジを示す。

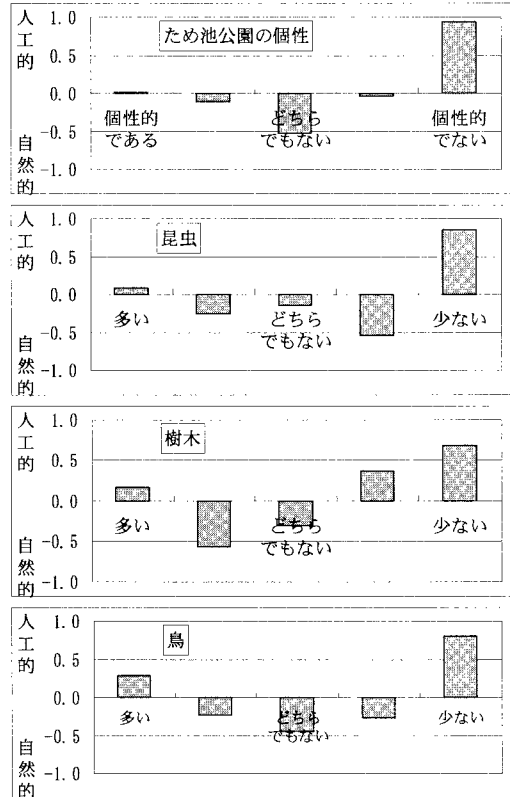


図-4 カテゴリースコア分布図

水質改善施設の擬似自然化に対する評価を目的要因、公園に対するイメージを説明要因として数値化

Ⅱ類による分析を行った。開放的、利用しやすい、マナーがよい、等5段階評価を設定した形容詞対34項目を挙げ、それぞれの項目の相関をとり、独立性の検定を行った結果、有意性1%、5%で相関のあった項目を説明要因として抽出した。数値化Ⅱ類に用いた目的要因、説明要因とレンジを表-3に示す。水質改善施設の人工性に対する評価は、公園の個性、昆虫、樹木、鳥の多さと関連性があった。これらの説明要因のカテゴリースコア分布図を図-4に示す。この結果から、水質改善施設が人工的であると評価している利用者と自然的であると評価している利用者の特徴を判別した。水質改善施設が人工的であると評価している利用者は、昆虫、樹木、鳥の量に対して多い、少ないという評価が明確であり、少ないと感じている人の方が人工的であるという評価の傾向が強いことが分かる。また水質改善施設に対して自然的と評価している利用者は昆虫や樹木、鳥の量について明確に評価していない傾向がある。

4. おわりに

本研究では市街地内ため池公園の水質改善施設に対する人工性、自然性の評価の違いの検討を行った。これらの評価の判断基準は、ため池公園が持つ個性、樹木の植栽量や公園に生息する昆虫や鳥と関連があり、水質改善施設が人工的であると評価する利用者は、公園内の昆虫、樹木、鳥の量に対して関心を持って評価していることが分かった。

【参考文献】

- 1) 和田、三浦、平野：市街地のため池の水環境整備に対する利用者の評価、平成9年度土木学会関西支部年次学術講演会講演概要、pp. VII-11-1-VII-11-2、1997。